



II. 選定・評価結果

1 選定・評価結果の概要

それぞれの分類群における検討対象種（植物では亜種、変種、一部の品種を、動物では亜種を含む。）の種数、及び評価の結果として選定された本土部レッドリスト 2020 見直し版への掲載種の種数を表 4 に記した。さらに、カテゴリー別の種数の内訳を表 5、6 に記した。表 4 では、本土部レッドリスト 2010 に掲載されておらず今回新たに掲載された種を新規掲載種、本土部レッドリスト 2010 に掲載されていて今回の改定によりレッドリストから外れた種を削除種として示した。なお、レッドリスト 1998 とそれ以降の掲載種数を比較する際には、評価基準が異なることに留意されたい（レッドリスト 1998 では環境庁レッドデータブック（当時）のカテゴリーを参考に、絶滅危惧種、危急種、希少種、絶滅に相当する種をそれぞれ A～D ランクとしている）。分類群ごとの評価方法については、「IV. 保護上重要な野生生物種」の各分類群ごとの「選定・評価方法の概要」を参照していただきたい。

今回、本土部レッドリスト 2020 から見直した掲載種の変更は、植物が 941 種から 943 種に増加、淡水魚類が 52 種から 50 種に減少、昆虫類が 444 種から 445 種に増加（チョウ目チョウ類が 1 種増加）、合計では 1,845 種から 1,846 種に 1 種増加している。

表 4 検討対象種及び掲載種の種数

分類群	項目	1998年版 掲載種	2010年版 (2013年5月修正) 掲載種	2020年版 掲載種	2020年見直し版			
					検討対象種 *1	掲載種	新規掲載種 *2	削除種 *2
植物		642	800	941	1,050	943	177	34
藻類		対象外	対象外	31	31	31	31	0
哺乳類		31	37	42	43	42	5	0
鳥類		107	162	162	173	162	10	10
爬虫類		13	14	13	14	13	0	1
両生類		14	15	15	15	15	0	0
淡水魚類		37	38	52	58	50	19	10
昆虫類		459	394	444	597	445	180	129
	トンボ目	67	59	50	60	50	1	10
	カマキリ目	対象外	3	2	3	2	0	1
	バッタ目	22	28	23	41	23	10	15
	カメムシ目	8	19	16	20	16	1	4
	ヘビトンボ目	対象外	5	5	5	5	0	0
	アミメカゲロウ目	対象外	1	2	2	2	1	0
	コウチュウ目	308	195	175	274	175	69	89
	ハチ目	対象外	15	20	21	20	6	1
	ハエ目	対象外	12	22	34	22	16	6
	チョウ目チョウ類	54	50	73	77	74	27	3
	チョウ目ガ類	対象外	7	56	60	56	49	0
甲殻類		対象外	15	22	31	22	8	1
クモ類		対象外	33	36	36	36	3	0
貝類		対象外	71	87	93	87	18	2
合計		1,303	1,579	1,845	2,136	1,846	451	187

*1 検討対象種には、2010年版掲載種が全て含まれている。

*2 新規掲載種、削除種は2010年版（2013年5月修正）との比較。

本土部レッドリスト 2020 から見直した種は、合計 120 種である。内訳は、植物が 80 種、哺乳類が 2 種、淡水魚類が 37 種、昆虫類が 1 種である。種ごとのカテゴリー変更の一覧は巻末 (P. 837 ~ 839) に示した。

植物は、80 種のうち 2 種は本土部レッドリスト 2020 から追加された種で、残りは既存のカテゴリーの変更である。哺乳類の 2 種はいずれも既存のカテゴリーの変更である。淡水魚類は、本土部レッドリスト 2020 から追加された種が 6 種で、逆に対象外とした種 (削除種) が 8 種である。昆虫類の 1 種は本土部レッドリスト 2020 から追加された種である。

表 5 分類群ごとの地域区分およびカテゴリー別種数内訳

分類群	カテゴリー	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A 類	絶滅危惧 I B 類	絶滅危惧 I 類	絶滅危惧 II 類	準絶滅危惧	情報不足	留意種	合計
	地域区分	EX	EW	CR	EN	CR+EN	VU	NT	DD		
植物	区 部	207	3	74	33	0	53	21	65	1	457
	北多摩	116	4	79	76	0	76	36	62	1	450
	南多摩	78	1	171	147	0	133	55	39	1	625
	西多摩	36	2	233	184	0	153	94	60	1	763
	本土部	100	5	276	226	0	211	94	29	1	942
藻類	本土部	4	0	0	0	2	2	2	21	0	31
哺乳類	区 部	17	0	0	0	0	0	2	6	2	27
	北多摩	1	0	0	2	0	1	4	4	0	12
	南多摩	1	0	0	1	0	12	3	2	0	19
	西多摩	2	0	0	4	0	8	11	1	1	27
	本土部	2	0	0	4	0	8	11	2	0	27
鳥類	区 部	8	0	36	20	0	26	13	17	3	123
	北多摩	0	0	16	5	0	32	21	6	2	82
	南多摩	0	0	14	15	0	34	36	6	0	105
	西多摩	0	0	14	10	0	32	31	11	1	99
	本土部	2	0	31	23	0	45	36	19	4	160
爬虫類	区 部	0	0	6	0	4	2	1	0	0	13
	北多摩	0	0	5	0	2	4	1	0	1	13
	南多摩	0	0	2	1	1	5	3	0	1	13
	西多摩	0	0	1	1	1	1	8	0	1	13
	本土部	0	0	1	1	1	8	2	0	0	13
両生類	区 部	0	0	4	2	0	1	0	0	0	7
	北多摩	0	0	3	3	0	4	1	0	0	11
	南多摩	0	0	1	6	0	6	1	0	0	14
	西多摩	0	0	0	4	0	3	8	0	0	15
	本土部	0	0	0	4	0	3	8	0	0	15

分類群	カテゴリー	絶滅 EX	野生 絶滅 EW	絶滅 危惧 I A類 CR	絶滅 危惧 I B類 EN	絶滅 危惧 I類 CR+EN	絶滅 危惧 II類 VU	準絶滅 危惧 NT	情報 不足 DD	留意種	合計
	地域区分										
淡水魚類	区 部	11	0	12	2	0	5	7	6	3	46
	北多摩	5	0	4	5	0	2	4	6	2	28
	南多摩	2	0	5	5	0	2	4	4	2	24
	西多摩	2	0	3	6	0	2	4	4	1	22
	本土部	8	0	12	6	0	5	9	7	3	50
昆虫類	区 部	95	0	66	30	0	46	32	17	0	286
	多摩部	49	0	46	32	0	72	82	41	0	322
	本土部	83	0	84	46	0	78	94	43	0	428
甲殻類	区 部	0	0	0	0	0	0	0	10	12	22
	北多摩	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5
	南多摩	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4
	西多摩	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
	本土部	0	0	0	0	0	0	0	10	12	22
クモ類	区 部	1	0	0	0	0	9	4	7	0	21
	北多摩	0	0	0	0	0	3	4	15	0	22
	南多摩	0	0	0	0	0	1	15	13	0	29
	西多摩	0	0	0	0	0	3	8	25	0	36
	本土部	0	0	0	0	0	3	17	16	0	36
貝類	区 部	12	0	0	0	12	4	10	13	0	51
	北多摩	0	0	0	0	5	2	6	3	0	16
	南多摩	0	0	0	0	8	7	10	10	2	37
	西多摩	0	0	0	0	7	11	13	8	1	40
	本土部	10	0	0	0	24	14	21	16	2	87

注) 藻類は、現時点では十分な評価資料を得ることが難しいため、地域区分は行わず本土部全体を対象として評価を行った。
 各分類群の本土部の合計数が表3の2020年見直し版掲載種の種数と一致しない分類群がある。これは、ここに示されていないランク外、データ無し、非分布の3つのカテゴリー（P18表3参照）に該当する種があるためである。以下の分類群である。

表5：植物、哺乳類、鳥類、昆虫類

表6：昆虫類全体、トンボ目、チョウ目チョウ類、チョウ目ガ類

表6 昆虫類の分類群ごとの地域区分およびカテゴリ別種数内訳

分類群	カテゴリ	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A 類	絶滅危惧 I B 類	絶滅危惧 I 類	絶滅危惧 II 類	準絶滅危惧	情報不足	留意種	合計
	地域区分	EX	EW	CR	EN	CR+EN	VU	NT	DD		
昆虫類全体	区 部	95	0	66	30	0	46	32	17	0	286
	多摩部	49	0	46	32	0	72	82	41	0	322
	本土部	83	0	84	46	0	78	94	43	0	428
トンボ目	区 部	16	0	12	4	0	10	3	1	0	46
	多摩部	8	0	7	7	0	12	6	2	0	42
	本土部	9	0	12	10	0	9	7	2	0	49
カマキリ目	区 部	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2
	多摩部	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	本土部	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2
バッタ目	区 部	6	0	5	0	0	2	0	7	0	20
	多摩部	2	0	6	3	0	1	3	4	0	19
	本土部	4	0	6	3	0	2	3	5	0	23
カメムシ目	区 部	4	0	5	3	0	0	0	3	0	14
	多摩部	4	0	3	2	0	1	1	2	0	12
	本土部	3	0	6	3	0	1	1	1	0	16
ヘビトンボ目	区 部	0	0	1	0	0	1	0	1	0	3
	多摩部	0	0	1	0	0	2	1	1	0	5
	本土部	0	0	1	0	0	2	1	1	0	5
アミメカゲロウ目	区 部	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	多摩部	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	本土部	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
コウチュウ目	区 部	44	0	22	14	0	20	7	1	0	108
	多摩部	12	0	18	7	0	19	34	5	0	95
	本土部	42	0	47	17	0	25	37	7	0	175
ハチ目	区 部	4	0	0	0	0	0	5	4	0	13
	多摩部	4	0	0	0	0	0	4	11	0	19
	本土部	4	0	0	0	0	0	7	9	0	20
ハエ目	区 部	0	0	0	0	0	0	8	0	0	8
	多摩部	1	0	0	0	0	0	2	15	0	18
	本土部	2	0	0	0	0	0	5	15	0	22
チョウ目 チョウ類	区 部	15	0	14	5	0	6	2	0	0	42
	多摩部	13	0	3	8	0	12	18	2	0	56
	本土部	14	0	3	8	0	14	18	2	0	59
チョウ類 ガ類	区 部	4	0	7	4	0	7	6	0	0	28
	多摩部	3	0	7	5	0	25	13	0	0	53
	本土部	3	0	8	5	0	25	14	0	0	55

■本土部レッドリスト 2010 掲載種のうち、本土部レッドリスト 2020 見直し版で対象外となった種（削除種）

植物は、区部では元々少ないが主要な生育地である多摩部で生育が安定している種や、サラサドウダンのように西多摩の山地には非常に個体数が多い種については、本土部全域を評価した場合に健全と評価されたため、18種が対象外となった。近年の水辺の水質改善等により、ネコヤナギ、マコモの2種は生育分布情報が増加傾向にあり対象外となった。その他、過去の記録の見直しや分類学上の種の取り扱いの変更により対象外となった種が14種ある。

表7 植物で対象外（削除種）とした理由と対象種

対象外とした理由		種数	対象種
本土部全域として健全と判断されるため	本土部全域で生育分布状況が健全と判断された	18種	イチヤクソウ、イワヒメワラビ、ウチワゴケ、オウレンシダ、オノエヤナギ、キバナアキギリ、キヨスミヒメワラビ、ササクサ、ツノハシバミ、ツリフネソウ、ツルカノコソウ、トウゲシバ、ナガバノコウヤボウキ、ハシゴシダ、ハリガネワラビ、マメツタ、ラショウモンカズラ、サラサドウダン
	水辺の水質改善等によって生育分布情報が増加傾向にある	2種	ネコヤナギ、マコモ
過去の記録や標本の再確認を行った結果、非分布であることが明らかになった種		4種	イワツクバネウツギ、ヒロハツリシュスラン、ミミカキグサ、ヒメイワカガミ
自然分布である確証が得られないものや、過去の記録が植栽や栽培品であったため		4種	ヒメコウホネ、カザグルマ、モクレイシ、カンボク
分類学上の種の取り扱いの変更のため		6種	タカオワニグチソウ*1、ハイホラゴケ*1、ヤツシロヒトツバ*1、アズマカモメヅル*2、ミヤマシケシダ*3、チチブヤナギ
合 計		34種	

*1 最新の知見により雑種であることが判明 *2 コバノカモメヅルの白花品種である

*3 ミヤマシケシダは近年、ミヤマシケシダ、ハクモウイノデ、ウスゲミヤマシケシダの3種に分けられたが、このうちミヤマシケシダは非分布と判断された

動物では、全体で153種が対象外となった。この中では、生息分布情報が増加傾向の種や、本土部全域で生息分布状況が安定している種などの理由で比較的多く生息していると判断された種が約6割を占め、鳥類1種、昆虫類93種、貝類2種が挙げられる。次に多いのがイワヒバリなどのように、限られた場所に生息するため生息分布情報が基本的に少ない種であるが、生息状況は安定していると判断されるため対象外となった種で、鳥類1種、淡水魚類3種、昆虫類23種である。また、トンボ類のコオニヤンマやオナガサナエは、河川の水質改善によって生息分布情報が増加傾向にあるといったように具体的な回復状況が示された種も見られる。甲殻類のケフサイソガニは、留意種の選定基準の見直しにより該当しなくなった種である。

外来種と考えられるため対象外となった種は、国外外来種の鳥類のシラコバト、爬虫類のクサガメ、国内外来種の魚類のカマツカ、ナマズである。また逸出由来と考えられる昆虫類のヒロボネカンタンやクロマルハナバチも対象外となっている。

非分布と判断された種は、鳥類のオオヨシゴイやタゲリなど稀に飛来する種などと判断された7種である。また、主に海水域に分布する魚類2種や、東京都には分布しないと考えられた淡水魚類3種である。

評価できる情報が十分に得られないと判断された種は、昆虫類のアトモンコミズギワゴミムシ、タナカツヤハネゴミムシ、クシヒゲハネカクシの3種である。

表 8 動物で対象外（削除種）とした理由と対象種

対象外とした理由	種数	対象種
生息分布に関する情報があり、比較的安定した生息状態であると判断された種	生息分布情報が増加傾向にあるため	5種 【■トンボ目】 ムスジイトトンボ・オオルリボシヤンマ 【■チョウ目（チョウ類）】 ウ斯巴アゲハ・ミズイロオナガシジミ・コムラサキ
	本土部全域で生息分布状況が安定していると判断されるため	91種 【■鳥類】 エナガ 【■トンボ目】 ミルンヤンマ・ウチワヤンマ・ダビドサナエ・ヒメサナエ・オニヤンマ・タカネトンボ 【■バッタ目】 ハネナシコロギス・クマコオロギ・ヒメコオロギ・タンボコオロギ・クマズムシ・ヒゲシロスズ・ヤチスズ・キンヒバリ・アシグロツユムシ・ヘリグロツユムシ・シブイロカヤキリ・ショウリョウバッタモドキ 【■カメムシ目】 ヒグラシ・シマアメンボ 【■コウチュウ目】 エリザハンミョウ・ニワハンミョウ・コハンミョウ・ヒメマイマイカブリ・クロナガオサムシ・クラサワメクラチビゴミムシ・オオイクビツヤゴモクムシ・ニッポンヨツボシゴミムシ・トックリゴミムシ・チャバネクビナガゴミムシ・ルイスナガゴミムシ・アトグロジュウジアトキリゴミムシ・アオヘリホンゴミムシ・オサシデムシモドキ・シラオビシデムシモドキ・ミヤマクワガタ・スジクワガタ・ノコギリクワガタ・マエカドコエンマコガネ・ヒメトラハナムグリ・クロカナブン・コカブトムシ・マスダクロホシタマムシ・ウスバカミキリ・ノコギリカミキリ・コバネカミキリ・クロカミキリ・サビカミキリ・オオマルクビヒラタカミキリ・ホソカミキリ・ツヤケシハナカミキリ・アカハナカミキリ・ヒナルリハナカミキリ・ムネアカクロハナカミキリ・ツマグロハナカミキリ・ヨツスジハナカミキリ・オオヨツスジハナカミキリ・ホンドニセハイイロハナカミキリ・フタコブルリハナカミキリ・キマダラカミキリ・ミヤマカミキリ・マルクビケマダラカミキリ・タイワンメダカカミキリ・オダヒゲナガコバネカミキリ・クスベニカミキリ・ミドリカミキリ・アオカミキリ・スギカミキリ・タケトラカミキリ・キスジトラカミキリ・キイロトラカミキリ・ホソトラカミキリ・ブドウトラカミキリ・トガリバアカナトラカミキリ・ホタルカミキリ・シロオビゴマフカミキリ・キクスイモドキカミキリ・ハイイロヤハズカミキリ・センノカミキリ・ヒゲナガカミキリ・ヒメヒゲナガカミキリ・ヒゲナガゴマフカミキリ・カッコウカミキリ・フタオビアラカミキリ・シラオビゴマフケシカミキリ・ヤツメカミキリ・オニグルミノキモンカミキリ・ヘリグロリンゴカミキリ 【■貝類】 カワグチツボ・ウミゴマツボ
	河川の水質改善によって生息分布情報が増加傾向にあるため	2種 【■トンボ目】 コオニヤンマ・オナガサナエ
	生息地が限られているが、その生息地や生息状況が安定していると判断されるため	27種 【■鳥類】 イワヒバリ 【■淡水魚類】 ボウズハゼ・アベハゼ・ビリンゴ 【■カマキリ目】 ヒメカマキリ 【■バッタ目】 コロギス・アオフキバッタ 【■カメムシ目】 アカエゾゼミ・チッチゼミ 【■コウチュウ目】 キアシルリミズギワゴミムシ・ヒメクロツヤヒラタゴミムシ・コクロツヤヒラタゴミムシ・ヒョウゴマルガタゴミムシ・ツヤマルガタゴミムシ・オオクロツヤゴモクムシ・ヒコサンツヤゴモクムシ・キュウシュウツヤゴモクムシ・キイロアトキリゴミムシ・キンボシマルズオオハネカクシ・クロガネトガリオズハネカクシ・クロヒゲオレハネカクシ・ツヤスジコガネ・トラハナムグリ・カタキハナカミキリ・クロトラカミキリ・シロオビトラカミキリ・スギノアカネトラカミキリ
	留意種の選定基準の見直しにより該当しなくなったため	7種 【■ハエ目】 オオイシアブ・クロベッコウハナアブ・チャイロオオイシアブ・ハマダラハルカ・ミカドガガンボ・ミドリバエ 【■甲殻類】 ケフサイソガニ
外来種	近年確認される個体は逸出由来と考えられるため	2種 【■バッタ目】 ヒロバネカンタン 【■ハチ目】 クロマルハナバチ
	国内外来種と考えられるため	2種 【■淡水魚類】 カマツカ・ナマズ
	外来種に該当するため	2種 【■鳥類】 シラコバト 【■爬虫類】 クサガメ
非分布	本土部において非分布と判断されるため	10種 【■鳥類】 アメリカヒドリ・オオヨシゴイ・タゲリ・オオハシシギ・ヒバリシギ・ウズラシギ・ノジコ 【■淡水魚類】 ルリヨシノボリ・オオヨシノボリ・クロヨシノボリ
	対象種は主に海域に生息するため	2種 【■淡水魚類】 イシカワシラウオ・モヨウハゼ
情報不足	評価できる情報が十分に得られないため	3種 【■コウチュウ目】 アトモンコミズギワゴミムシ・タナカツヤハネゴミムシ・クシヒゲハネカクシ
合計	153種	

2 東京都レッドリスト（本土部）の経年変化

(1) 掲載種の経年変化

掲載種は、レッドリスト 1998 が 1303 種、本土部レッドリスト 2010 が 1579 種、本土部レッドリスト 2020 見直し版が 1846 種となっている。1998 年版から 2010 年版にかけては 12.1%、276 種増加しており、2010 年版から 2020 年見直し版にかけては 11.7%、267 種増加している。2010 年版から 2020 年見直し版にかけて新たに掲載された新規種が 451 種、共通する種が 1395 種、対象外となった種が 187 種であった。

掲載対象とした分類群は、1998 年版から 2010 年版では、甲殻類、クモ類、貝類、昆虫類のカマキリ目、ヘビトンボ目、アミメカゲロウ目、ハチ目、ハエ目、チョウ目ガ類の 6 グループが増え、2010 年版から 2020 年版では藻類が増えた。

2010 年版から 2020 年見直し版で種数が増加していない分類群は、鳥類（162 種）、両生類（15 種）、ヘビトンボ目（5 種）である。その他の分類群の多くは種数が増加しているが、爬虫類（1 種減）、トンボ目（9 種減）カマキリ目（1 種減）、バッタ目（5 種減）、カメムシ目（3 種減）、コウチュウ目（20 種減）では種数が減少している。

新規掲載種には、主に、生息環境の減少や改変、管理放棄やシカ食害などによる植生変化、他地域からの生きものの持ち込み等による遺伝子攪乱等の影響を受け、以前よりも絶滅リスクが高まった種のほかに、現地調査や文献等による新たな情報集積が行われたことにより生育・生息が確認された種も含まれている。

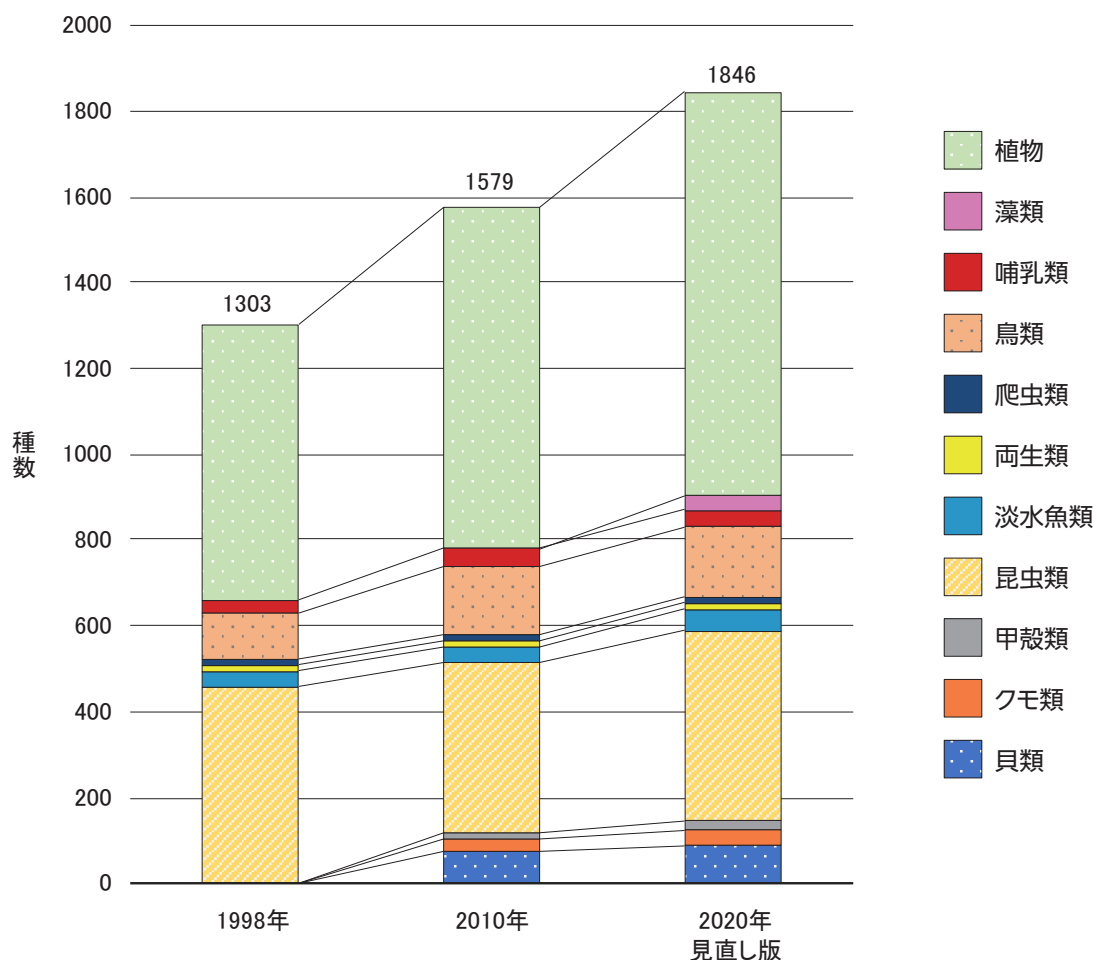
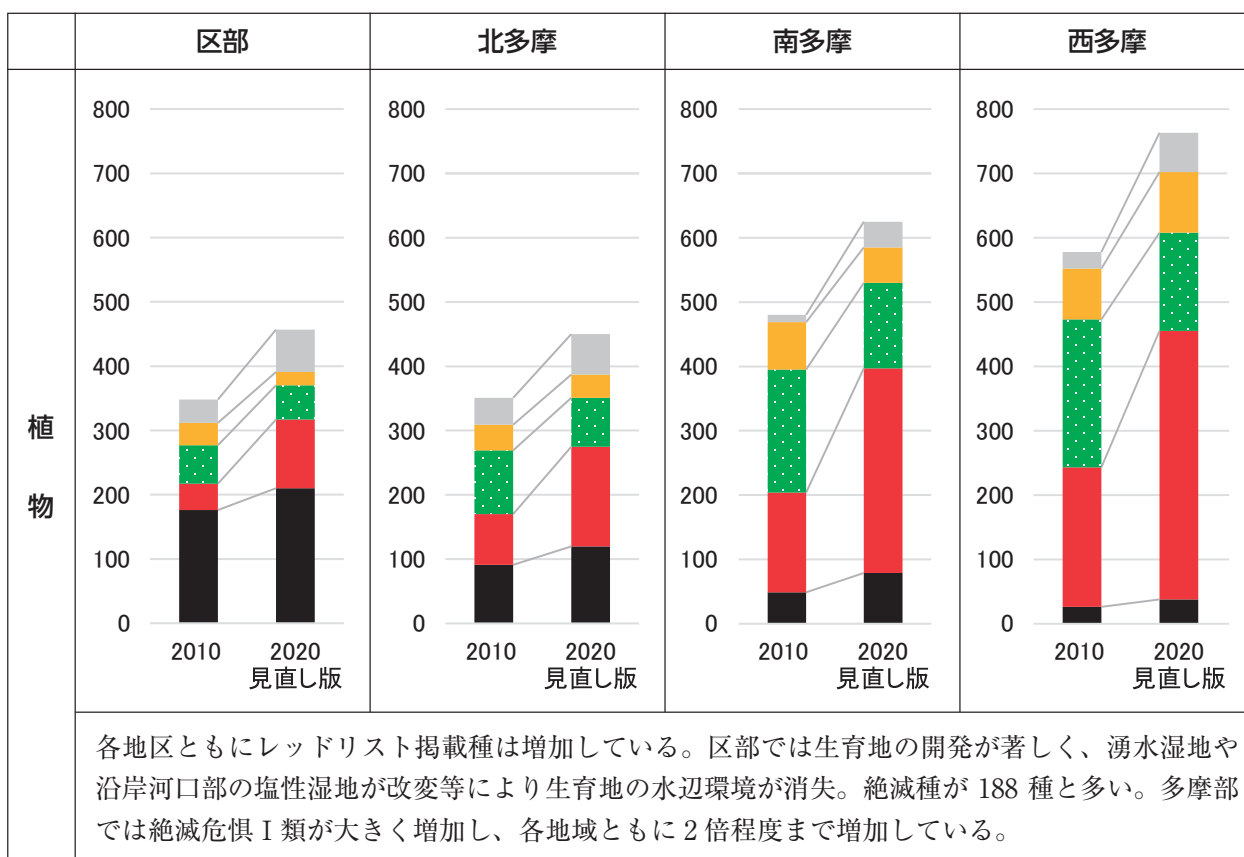


図 2 東京都レッドリスト（本土部）掲載種の経年変化

(2) 分類群別カテゴリーの変化

2010年版と2020年見直し版における地域別のカテゴリーごとの種数の変化について、分類群ごとに以下に示す。地域はカテゴリーを評価した区部、北多摩、南多摩、西多摩の4地域としているが、昆虫類は2020年版以降は区部と多摩部（北多摩、南多摩、西多摩を一つにまとめた地域）の2地域で評価しているため、2010年版との比較ができない。そのため、区部での比較と本土部全体での比較とした。

レッドリスト掲載種は、前回に比べ種数が減少している分類群もあるが、全体として種数は増加傾向にある。増加の主な理由として環境悪化などの生息・生育環境の変化が挙げられるが、種によっては分類学的な再検討や新たな文献の発見などにより種数が増えている場合もある。



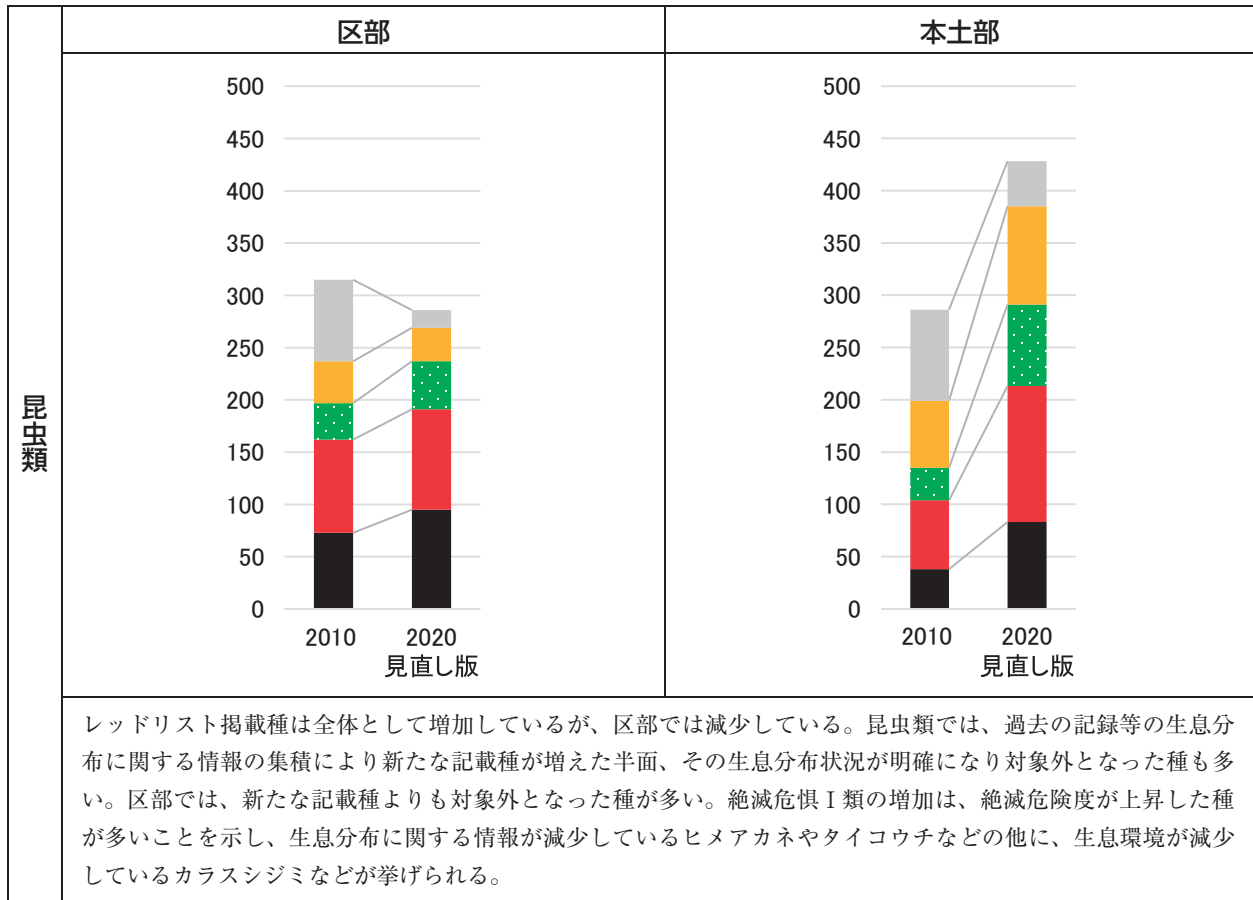
■ 絶滅 ■ 絶滅危惧Ⅰ類 ■ 絶滅危惧Ⅱ類 ■ 準絶滅危惧 ■ 情報不足・留意種

	区部	北多摩	南多摩	西多摩
哺乳類				
	<p>区部でカヤネズミやアカギツネの情報が得られるなど、これまで絶滅したとされていた地区での新たな情報集積により、絶滅種の種数が減少した。全体では絶滅危惧Ⅱ類が増加している。特にその傾向は南多摩で顕著であるが、これまでデータの無かったコウモリ類などの情報集積により、新たに評価された種が多かったためである。</p>			
鳥類				
	<p>絶滅種は、区部では繁殖情報が30年以上にわたり記録されなかったサンコウチョウやオオリなどが新たに加わったが、多摩部では種に変化がない。多摩部ではレッドリスト掲載種が減少するなか、絶滅危惧Ⅱ類が減少し、絶滅危惧Ⅰ類が増加（北多摩は除く）する傾向が見られる。河口部のオオヨシキリやチドリ類、山地のコルリやクロジなど、環境の変化により減少傾向を示す種が挙げられている。</p>			
爬虫類				
	<p>クサガメ1種が対象外となり、レッドリスト掲載種は減少した。西多摩以外では、絶滅危惧Ⅰ類の増加がみられ、特に北多摩では顕著である。これに対して西多摩の対象種は、ランクの変動がなく安定している。</p>			
両生類				
	<p>両生類のレッドリスト掲載種に変化はないが、各地区で新たな生息情報の集積により掲載種が増加している。西多摩では、ニホンアカガエルやトウキョウダルマガエルが絶滅危惧Ⅱ類からⅠ類にランクが上がるなど、西多摩における両生類の絶滅危険度が高まっている。</p>			

絶滅
 絶滅危惧Ⅰ類
 絶滅危惧Ⅱ類
 準絶滅危惧
 情報不足・留意種

	区部	北多摩	南多摩	西多摩
淡水魚類				
	4地域ともに、レッドリスト掲載種が増加している。区部では、絶滅種も増加している。多摩地区では絶滅危惧Ⅱ類が減少し、代わって絶滅危惧Ⅰ類が増加しており、本土部全体で絶滅危険度が増している。			
甲殻類				
	甲殻類のレッドリスト掲載種は増加しているが、全てが情報不足に該当する。区部の河口域や沿岸部に生息する種が多く挙げられている。なお、留意種の選定基準の見直しにより該当しなくなったケフサイソガニ1種が対象外となっている。			
クモ類				
	生息環境の減少により、ヤエンオニグモなどが新たな掲載種となっている。絶滅危惧Ⅰ類に該当する種はみられないが、絶滅危惧Ⅱ類に該当する種が区部でやや増加傾向を示しているのに対して、多摩部では大きな変化は見られない。			
貝類				
	生息分布に関する新たな情報や、現地調査による新たな生息情報などにより、全体的に掲載種が増えている。絶滅種は区部でのみ記録されており、カタマメマイマイ、ヒラマキモドキの2種が新たに絶滅種として挙げられている。貝類では、絶滅危惧Ⅰ類、絶滅危惧Ⅱ類ともに増加傾向を示しており、特に南多摩や西多摩で顕著である。			

絶滅
 絶滅危惧Ⅰ類
 絶滅危惧Ⅱ類
 準絶滅危惧
 情報不足・留意種



絶滅
 絶滅危惧Ⅰ類
 絶滅危惧Ⅱ類
 準絶滅危惧
 情報不足・留意種

(3) 絶滅種の変化

掲載種のうち、絶滅種は本土部全体で本土部レッドリスト 2010 では 123 種であったのが、本土部レッドリスト 2020 見直し版では 209 種と 86 種増加している。その内訳は、下図に示すように、植物と昆虫が多く、その他の分類群はいずれも 10 種以下である。また、絶滅種が増加している多くが植物と昆虫類である。

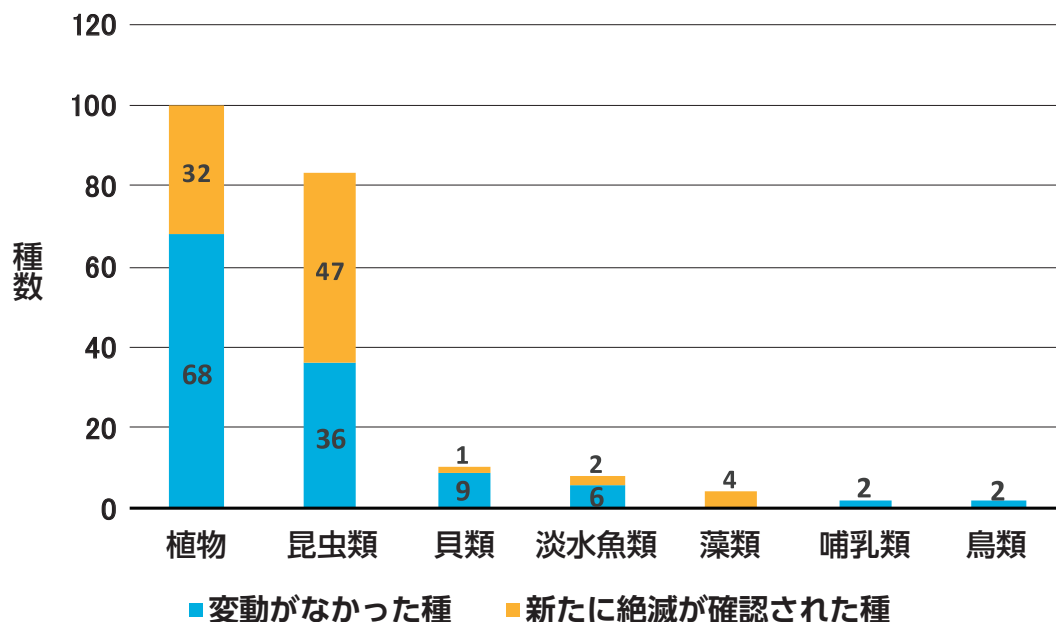


図3 絶滅種 (EX) における 2010 年版から 2020 年見直し版にかけての種数変化

注) 藻類は、2010 年版では対象外

植物の絶滅種 100 種では、湿地環境に依存する種が半数以上と圧倒的に多く、次に草地、樹林地、池沼・河川などに依存する種となっている。また、2010 年版では絶滅種ではなかったが、2020 年見直し版で新たに絶滅が確認された種についても上記と同様の傾向がみられる。

2010 年版では掲載種でなかったが、今回新たに掲載されることになった新規記載の絶滅種は、フトヒルムシロ、ハシバミ、ノダイオウなど 10 種である。これらは記録や標本から、過去に生育していた情報が得られたため、新たに追加した。

動物の哺乳類 (2 種)、鳥類 (2 種)、淡水魚類 (6 種)、貝類 (9 種) は、2010 年版と変動がない種類で、50 年以上にわたり生息情報が得られていない種である。なお鳥類のうち区部で 30 年以上繁殖情報の無い 6 種が区部における絶滅種に位置づけられている。

2010 年版には掲載されていなかった種で、2020 年見直し版で絶滅種として新規掲載された種は、昆虫類で 28 種、淡水魚類で 2 種、貝類で 1 種となる。これらは、新たな情報が集積され、その記録から過去に生息していた情報が得られたため、新たに追加されたものである。

2010 年版の掲載種のうち 2020 年見直し版で新たに絶滅したとされた種は、昆虫類の 19 種である。これらのほとんどは、河川敷やヨシ原、干潟、水田環境、池沼、湧水などの水辺環境に依存する種と、山地の草地環境に依存する種である。丘陵地の池沼や河口域の自然植生の減少、シカ食害や管理放棄による草地環境の減少などが主要な原因と考えられる種である。